

## いま、ことばの教室でやっていること

宇都宮市立陽東小学校 高木浩明

### ことばの教室の日常

今年度、11人のどもる子どもたちがことばの教室に通っている。学年や通級期間、さらには子どもたちのどもりに対しての思いや考えも違うので、ことばの教室でやっていることも様々となる。ただ、そうした中でも通級を始めたばかりの子どもたちとは、「吃音っていった何だろう?」「どもる人はどんな生き方をしているんだろう?」とまずは吃音やどもる人のことを知ることに焦点を当てることが多い。そして、どもる人は100人にひとりいることや、『吃音ワークブック』（解放出版社）の治療法や職業のワークなどに取組んだり、吃音の冰山を一緒に考えたりする。

それに対して、もう少し通級期間の長い子どもたちの場合は、「なかなか教室で発表できない」「まわりの子たちにどもりのことを知らせたいけど、思うようにいかない」「今は大丈夫だけど、大人になってからが心配」といった、子どもたち自身が感じている自分の課題やテーマについて、一緒に考える時間が増えてくる。

いずれの取り組みでも子どもたちと話し合うことが中心的な活動であり、これを支えているのが、当事者として子どもたちの語りである。もちろん子どもたちは、最初から自分の思いや考えをスラスラ話しているわけではない。ちょっとした問い掛けに対しても、黙ってしまったり、分からないと答えたりもする。けれど、ちょっと時間に余裕をもつようにして、別の角度から質問したり、これまでに聞いた他の子どものことばを伝えたりしていくと、自分の言いたいことばを見つけ、だんだん語り出してくることが多い。

なので、子どもが止まってしまった時に、「この子は、どんなことが言いたいんだろう?」「そこにたどり着けるようなことばって何だろう?」と、こちらも一緒になって、ちょっとぼうっと考えてみることも、結構大切だったりする。そうやって、出来事や自分の体験、さらにはそれに対しての思いや考えに当てはることばを一緒に探すが、ことばの教室で進められるもっともベーシックな子どもとの協同作業ではないだろうか。

### 他の子は、どう思う?

5月の連休明け、4年生の明夫はことばの教室に来るなり「この前、クラスの女の子たちが、僕が授業でどもって発表したら、笑ってきた。それがすごく嫌で、頭にきた。その時は、すぐに先生が注意して、その子たちも謝ったからいいやと思ったけど、やっぱり今も怒る気持ちがなくなる」と話し始めた。「4年生になる時、1クラス増えたので急にクラス替えがなくなった。最初はちょっと不安だったけど、だんだんクラスみんなに慣れてきたし、みんなの前でどもって発表とか話しても、何か言われたり、からかわれたりすることはなかった」「安心していたところにいきなりだったから、すごくショックだった」と、状況を整理する中で「きっと、あの子たちはどもりのこと何も知らないかも」「どもることじゃなくて、焦っているみたいなところを笑ったのかもしれない」というそれまで意識していない部分が見え始め、「ちょっと楽になった」となった感じたところで、その日のことばの教室は終了になった。

この明夫の話は、2月にグループ学習会に参加して顔見知りになった8人も含んだ11人の子どもたち全員で共有して考える題材になった。「自分も笑われて嫌だった」「悲しい気持ちになる」「そんなことになったらどうしよう。心配だなあ」といった声に加えて「その女の子たちって、どういう子なんだろう?」「今まで一緒にクラスだった子はいなかったの?」「笑った子は、何人だったの?もしかしたら、いっぱいいたように思うけど2人とか3人だったりしない?」といった質問も出てきた。そこから、明夫と他の子どもたちとの緩やかなやりとりが始まった。

実は、明夫にとっても、他の子どもたちにとっても、自分以外の子がどんなことを感じ、考えているのかが、とっても気になることだった。だから、自分と同じあるいは違う思いや考えを聞く度に、「そうなんだ」「そういうこともあるんだ」となっていった。その中で「どうして、授業中に笑ったんだろう」という一人の子の呟きに多くの子どもたちが反応した。それは、「休み時間とか下校の時だったら、先生は見てないからやるかもしれないけど、私だったら怒られそうなことを先生の前でやったりしないよ」という、ごく当たり前の子どもの思いでもあった。

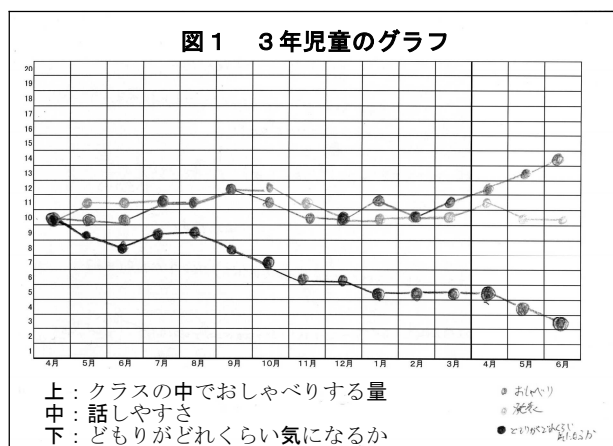
そこから子どもたちの考えは「怒られると思っていないから、笑ったんだろう」「特別なことじゃなくて、誰にでもある普通のことだと思ったのかもしれない」と広がっていき、あるいは「どもりのことを知らないで、どう反応（対応）していいかわからなくて、笑いで誤魔化そうとしたりしないかなあ」という気づきに繋がっていった。さらに「もしかしたら、すごく意地悪だったり、嫌な気持ちにしようと思っていなくても、こういうことをする子もいるかもしれない」「やっぱり、どもりについてちゃんと知ってもらわないと、大変なのかなあ」という新たな語りも生まれ、子どもたちにとって「自分のまわりの人にどもりのことを知って欲しいけど、どうしたらいいかわからない」という大きなテーマと直面することになった。

### 自分の様子をグラフに表してみる

自分はどれくらい教室でおしゃべりしているか？ 発表しているか？ どもりのことがどれくらい気になっているか？ といったことを、簡単なグラフに表す課題に取り組んだ。今回は昨年4月から今年の6月までというやや短い期間の中で、自分がどんなふうに変化したか振り返るようにしたが、子どもたちはクラス替えや転校生、新しい担任の先生など様々ことに出会っている。ただし、自分の状況を客観的に数値（1～20）で表すことはなかなか難しいので、昨年の4月の値を10とし、その後どんなふうに変化するのかわかえるようにした。すると、まだ通級を始めたばかりの低学年の児童も、興味深く、また楽しそうにグラフに値を書き込む様子が見られた。

できあがったグラフを見て、どもりが気になるかにしても、話す量にしても、実は結構変化していて、だから気になる気持ちが大きくなって、また下がるかもしれないし、話す量が減った時もあったけどその後で増えているから、今はこれくらいでも大丈夫なんだと、子どもたちは感じていた。さらに、どもりがちょっと気にならなくなって、話しやすさが増えて、それからちょっと経ったら話す量も増えたといった、細かな点に気付いた子どもたちもいた。（以下、そんな子どもたちから出てきたことばの一部です）

- 去年の1年間の中で、どうしてもものが気になる気持ちが少なくなったかは、よく分からない。いつの間にか下がった感じだけど、下がったという実感はある。4月にクラス替えがあって新しい友だちになった。だけど、どもっても嫌なことはないし、それでまたどもりが気にならなくなった。3年生になって話す量が増えたのは、友だちが面白いことをいっぱい言って、自分もそれに対していろいろ話すようになったからだと思う。（3年）
- 4月に転校生が入ってきたので、心配な気持ちが増えた。34人の中の1人が変わったけど心配になった。今まで、クラスみんなから、自分のどもりのことをはっきり受け入れてくれることばや態度がなかったから、何となく大丈夫だったけどまだ安心できない部分があるのかも。（4年）
- ぼくは、発表が苦手。原稿があれば、少しはOKだけど、普通に授業で発表するのがいや。だけど、算数とか理科ならちょっと大丈夫かも。本読みは平気だよ。（3年）
- 私の場合、しゃべる量が変わるのは、どもりとは関係なくて、友だちのことだったり、上手く話すことがまとめられないと思ったりするから。（4年）



- ・ 9月ごろに、3人ぐらいに笑われた。それで「やめて」と言ったけど、無視してきた。そのあとで違う子が、「なんでそんなことばになるの？」と聞いてきて、「くせがあるんだ」と答えたら「ふーん」になった。その頃は、どものり（ともり）のことがどんどん気になった。4月から新しい先生になった。そしてどもって話しても、先生は分かってくれたから、気になるのがちょっと下がった。でも友だちは「は？」という表情になったりするから、やっぱり気になることがある。「前はどもりたくないから、あんまり話さなかったり、「分かんない」とか言ってた。今はどもるかもしれないけど、言いたいことは言おうと思ってやってる。そしたら、しゃべることが増えて、どもることいっぱいあるけど、みんな聞いてくれるから、ちょっとは気になるのが少なくなってきた。（2年）
- ・ この前、授業参観で生活科の発表をした。ちょっとどもったけど、大丈夫だった。そしたら気になるが8→3に下がった感じ」「授業参観は大人の前だから、発表する前もちょっとは大丈夫と思っていた。それが「やっぱりOKなんだ」となって、すごく下がった（2年）

### グラフを比べる

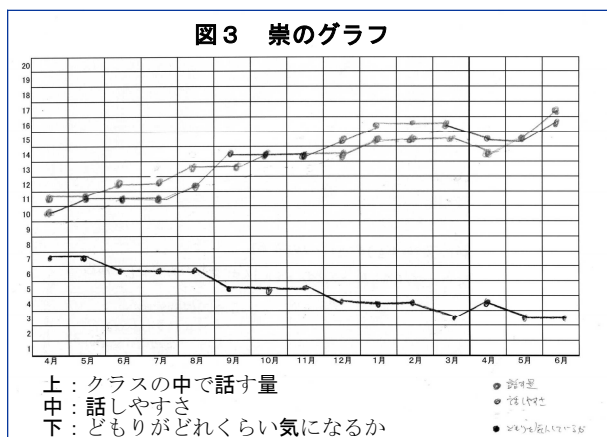
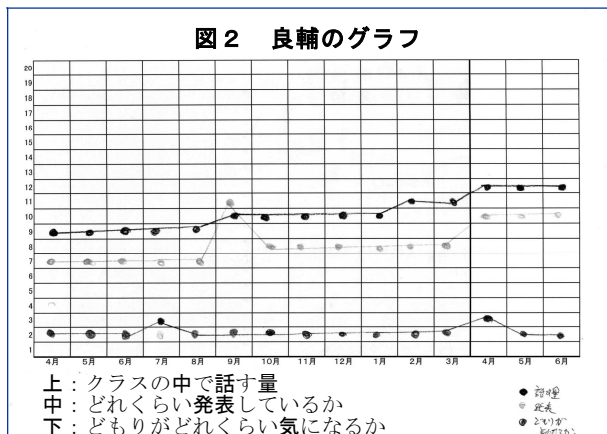
良輔（5年）は、一年前の4月を基準値にするのではなく、自分の状態をストレートに数値化して表そうとした。そしてできあがったグラフを見て、「こちらの方が自分が感じている自分自身の様子に合っている。何だか他の子のグラフがどんな感じなのか気になるなあ」と話していた。

良輔の場合、通級も4年目になり、この一年の中で、どもりに対する気持ちが変わることはなかった。それでも転校生がきたり、クラス替えがあると、ちょっとは気になる気持ちも増えるが、すぐに元に戻る感じだという。

そんな良輔に崇（4年）のグラフを見てもらった。実は崇は、クラスの中で話す量が1年ちょっとの間で、随分と増えている。それは新しいクラスの中で、自分がどもって話した時、まわりの人が普通に聞いてくれることが分かって、どもりを気にする気持ちが小さくなったし、話しやすくなったからだ、と説明してくれた。さらに去年の後半、グループ学習をやって、自分以外のどもる子に会って、どもりが前よりちょっと気にならなくなったと、クラスの中でいっぱい話せるようになったと、気持ちと行動が相互に関連しながら変化していると感じていた。

良輔（5年）この崇のグラフと自分のグラフを見比べ、ちょっと驚いたようだ。彼の場合、通級を始めたもっとどもりが気になった頃を振り返っても、どもりが気になることと、クラスの中でおしゃべりしたり、発表したりすることはほとんど関係しない。それよりも仲良しが増えるとか、友だちとの関係が変わったり、新しい担任の先生になってクラスの雰囲気が変わる方が、自分にとっては影響が大きいと捉えていた。

この良輔の考えを他の子どもたちに伝えると、「今まで、どもることがすごく自分にとって影響が大きいと思っていただけ、そうじゃないという子がいてびっくりした。だけどそう思う方が、今の自分ももっと変わっていけるような気がする。それもいいなあ」といった声が続いてきた。



※児童名は仮名です